

資料① 『OKINAWA1965』解説と3つのキーワード 公式ホームページより

1965年、米国占領下の沖縄。本土復帰を求める祖国復帰行進の最中、報道写真家の嬉野京子によって1枚の写真が撮影された。幼い少女が無残にも米軍のトラックに轢き殺された、当時の沖縄の縮図とも言える写真だ。太平洋戦争末期、凄惨な地上戦で多くの犠牲を払った沖縄には、戦後も安寧が訪れることはなかった。県民の土地は米軍が武力を持って強奪し、戦争のための基地が作られた。そこに駐留する米兵が起こした事件は、さらに人々を傷つけた。これに対して沖縄の住民たちが立ち上がったことで、本土復帰が実現。しかし、“基地のない平和な沖縄に”という願いははまだ果たされていない。この映画は、平和を求め続けた元海兵隊員のアレン・ネルソンさんや“沖縄のガンジー”こと阿波根昌鴻さんを始めとした人々の想いの記録。沖縄の戦後はまだ終わっていない。求めるものは、新辺野古基地建設断念、ひいてはすべての基地の廃止。そして、平和な未来への願い……。

(MovieWalker 映画『OKINAWA 1965』映画のストーリーより)

祖国復帰行進



日本への本土復帰を掲げる広範な団体が、それぞれの主張の違いを脇に置き、「祖国復帰」という一点で共同した沖縄県祖国復帰協議会（復帰協）が、主催した初の統一した行進運動。復帰協には、沖縄人民党、社会党、社会大衆党などに加え、保守系の会派も参加。労働組合や県内各地の青年団や婦人連合会、宗教者の団体も参加していた。

1964年に初めて行われた祖国復帰行進が、復帰協としてのコンセンサスを取れずに、沖縄人民党だけが取り組んだ結果、米軍の弾圧を受けたため、「祖国復帰の思いは共通。取り組むなら、やはり統一してやるべき」という声が強まり、1965年に実現。嬉野さんはこの初めての祖国復帰行進に参加している最中、米軍トラックによる幼児轢殺事件の写真を撮影した。

人間らしい生き方を求めて～阿波根昌鴻さんと非暴力平和運動～

嬉野さんが沖縄の中でも大切にしているの場所がある。伊江島の一般財団法人「わびあいの里」だ。ここには反戦平和資料館「ヌチドゥタカラ（命こそ宝）の家」があり、戦争と基地被害の証拠が所狭しと並べられている。

「ヌチドゥタカラの家」は農民の立場から非暴力平和運動を提唱し、基地反対闘争の先頭に立ってきた故・阿波根昌鴻さんが1992年に建立した平和をつくる実践活動の拠点である。

非暴力平和運動はその名の通り、暴力に頼らず、話し合いによって問題を解決していくというもの。沖縄戦やその後の様々な運動による経験で「暴力は何も生まない」と実感した阿波根さんの精神が産んだ運動方針である。

「ヌチドゥタカラの家」には、福祉施設「やすらぎの家」が併設されている。

障がいを持った人間にも老いた人間にも優しくなれる福祉の精神を持った社会づくりこそ、平和への第一歩であるという理念で造られた場所である。

阿波根さんは「福祉と平和の村」を目指していたのだ。平和運動と福祉というと全く別なもののように思ってしまうが、よく考えて見ると両方とも、思考する能力と理性を持った「人間」でなければ出来ないもともと「人間らしい」思考と言っても過言ではない。まさに憲法9条（反戦平和）や憲法25条（社会保障）の精神を具現化しようとする精神がここにはある。

アレン・ネルソン～『沖縄に基地はいらない』を提唱した元・米軍海兵隊員～

元海兵隊員のアレン・ネルソンさんは、1966年に沖縄のキャンプハンセンで訓練を受けて、ベトナム戦争に投入された。1995年に起きた12歳の少女レイプ事件について、自分で調べ、沖縄の基地が以前にもまして強化されていることを知り、翌年、沖縄で平和運動をしているグループに呼ばれる形で30年ぶりに沖縄を訪れた。アレンさんはアメリカで「沖縄駐留米軍をアメリカに連れ戻すネットワーク」を立ち上げ、年に一度はかならず沖縄に行った。

嬉野さんはアレンさんがこうした活動を日本でするのであれば、自分にできる手伝いをしたいと申し出た。アレンさんが日本で講演活動をするとき、ニューヨークから嬉野さんの家にやってきて、講演に出かけていく。移動の合間には嬉野さんの家で休息する。嬉野さんは、東北、甲信越、関東近辺は講演主催者との連絡も引き受け、会場まで案内していた。

【スタッフ】

企画・製作・監督：都鳥伸也

企画・製作・編集：都鳥拓也

撮影：都鳥拓也・小野寺享・都鳥伸也

整音：若林大介 現場録音・助監督：藤崎仁志

ナレーター：小林タカ鹿 朗読：太田いず帆・悠雲

タイトルデザイン：堤岳彦

【登場人物】

嬉野京子 謝花悦子 具志堅隆松

2017年/日本映画/95分

配給：ロングラン・映像メディア事業部

(映画『OKINAWA1965』公式ページより)

<http://longrun.main.jp/okinawa1965/index.html>

資料② 沖縄の米軍基地の現状

* 嬉野京子さんの講演資料より借用

**国土の0.6%に
74%の基地**

沖縄の米軍基地の現状 米海兵隊は日本本土から来た

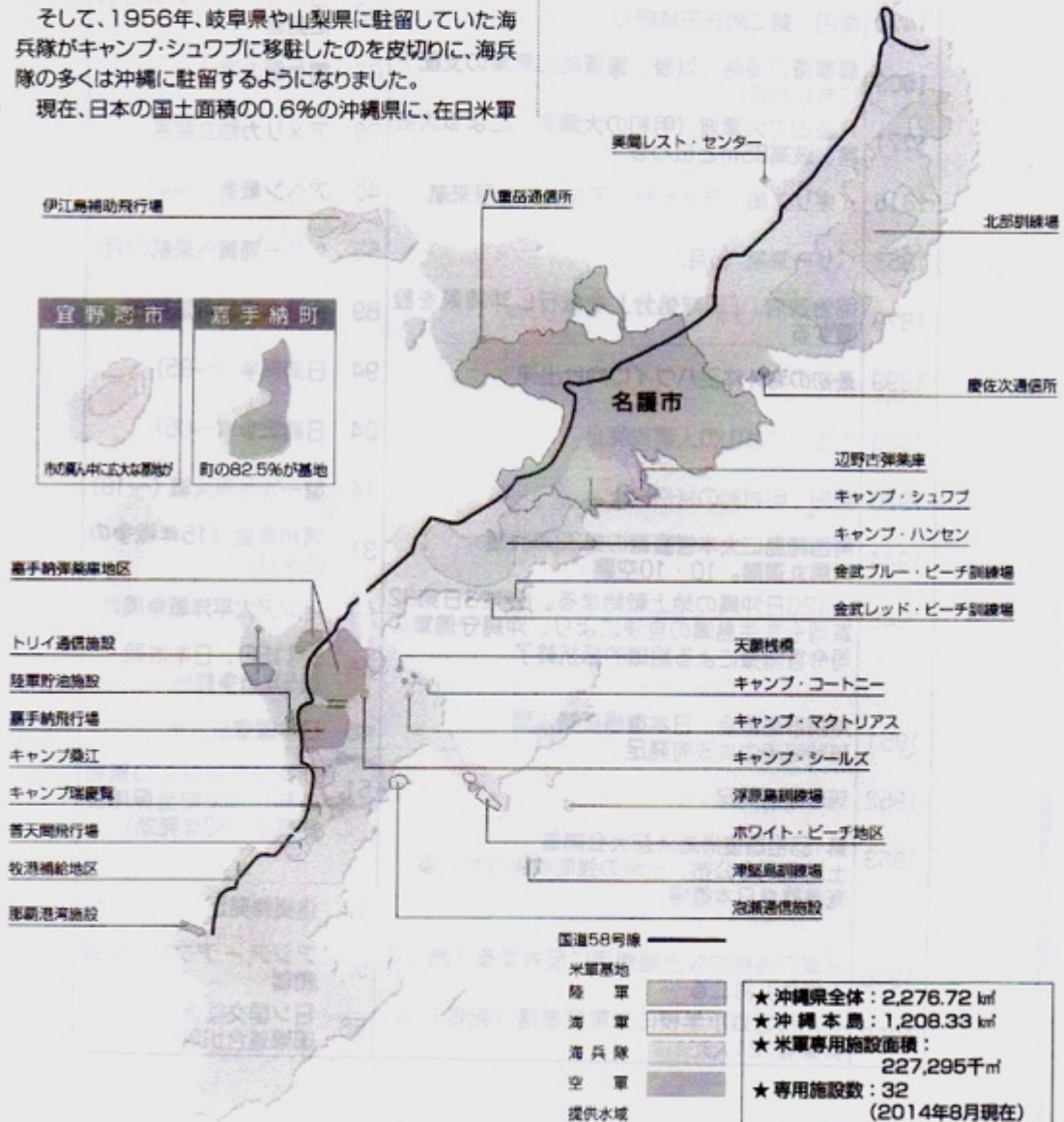
沖縄に駐留する米軍のうち、そのほとんどは海兵隊です。1950年代、米国海兵隊は岐阜県や山梨県に駐留していました。その頃、日本本土では米軍の演習場や基地の拡張に対する反発が強まっていた。

一方、沖縄はサンフランシスコ講和条約により奄美、小笠原とともに日本本土から切り離され、米軍の占領下におかれていました。

そして、1956年、岐阜県や山梨県に駐留していた海兵隊がキャンプ・シュワブに移駐したのを皮切りに、海兵隊の多くは沖縄に駐留するようになりました。

現在、日本の国土面積の0.6%の沖縄県に、在日米軍

専用施設面積の約74%が集中しています。そのほとんどが沖縄本島に存在し、沖縄本島面積の約18.2%を占めており、さらに、そのほとんど(約70%)が北部に集中しています。また、沖縄本島は県人口の約91%を占め、これら米軍基地は、都市機能、交通体系、産業振興、土地利用に大きな制約を与えています。



資料③ 琉球・沖縄史年表 1 (1187～1969)

* 嬉野京子さんの講演資料より借用。200年以降は憲法を考える映画の会で加筆

年代	琉球・沖縄の出来事	日本と世界の出来事
1187	琉球最初の国王と伝えられる舜天即位	1156 保元の乱
1372	察度王、中国に初めて進貢	1368 中国、元滅び明起こる
1429	尚巴志、琉球を統一（第一尚氏王統）琉球王国成立	
1470	尚円、第二尚氏王統開く	1492 コロンブスアメリカに到達
1609	薩摩藩の侵略。以降実質的に島津の支配下に置かれる	1600 関ヶ原の戦い
1771	八重山で大津波による大被害、波高 85m と伝わる	1776 アメリカ独立宣言
1816	イギリス船ライア号・アルセスト号来航	1840 アヘン戦争
1853	ペリー来航（5月）	1853 ペリー浦賀へ来航
1879	明治政府「琉球処分」を敢行し沖縄県を設置する	1889 大日本帝国憲法発布
1899	最初の海外移民ハワイに向け出発	1894 日清戦争（～95）
1903	宮古・八重山の人頭税廃止	1904 日露戦争（～05）
1920	県制・町村制の特例廃止	1914 第一次世界大戦（～18）
		1931 満州事変（15年戦争の始まり）
1944	南西諸島に大本営直轄の第32軍設置。対馬丸遭難。10.10空襲	1941 アジア太平洋戦争開始
1945	3月26日沖縄の地上戦始まる。6月23日第32軍司令官牛島満の自決 により沖縄守備軍の司令官指揮による組織的抵抗終了 沖縄群島議会、日本復帰要請決議	1945 8月15日、日本敗戦（15年戦争終結）
1951	琉球臨時中央政府発足	1951 サンフランシスコ講和条約・日米安全保障条約調印（52年発効）
1952	琉球政府発足	
1953	第1回祖国復帰総決起大会開催 土地収用令公布、土地の強制収用行われる。奄美群島日本復帰	1954 自衛隊発足
1956	米軍の強権的な土地使用に反対する「島ぐるみ闘争」	1955 アジア-アフリカ会議開催
1959	石川市宮森小学校に米軍機墜落（死者17人、負傷者21人）	1956 日ソ国交回復。国際連合加盟
1960	沖縄祖国復帰協議会結成。アイゼンハワー米大統領沖縄訪問	1960 安保条約改訂
		1962 キューバ危機
1965	佐藤首相来沖「沖縄が復帰しない限り日本の戦後は終わらない」声明。 イリオモテヤマネコ発見	1964 東京オリンピック
1968	初の公選主席に屋良朝苗当選 嘉手納基地でB52墜落炎上	1965 米、ベトナム北爆開始
1969	毒ガス兵器の配備がガス漏れ事故で明るみになり撤去運動起こる 佐藤・ニクソン会談で沖縄の72年返還決まる	1968 小笠原諸島返還
		1969 米、アポロ11号月面着陸

資料③ 琉球・沖縄史年表 2 (1970～2018)

1970	戦後初の国会議員選挙実施 コザで反米騒動（コザ事件）	1970 大阪万国博覧会開催
1972	施政権が日本に返還され、沖縄県誕生	1972 日中国交正常化
1975	国際海洋博覧会開催	1973 ベトナム和平協定 石油危機
1978	交通方法変更	1975 第1回サミット
1985	宮古島トライアスロン、那覇マラソン始まる。米兵凶悪事件続発	1986 ソ連、チェルノブイリ原発事故
		1989 消費税課税実施。天安門事件
		1990 東西ドイツ統一
		1991 湾岸戦争。ソ連邦解体
1995	「平和の礎」除幕。軍天法成立。知事代理署名を拒否 米兵の少女暴行事件に抗議する県民総決起集会	1993 自民党の一党独裁支配崩れる
1996	象のオリ、国による「不法占拠」状態となる。普天間飛行場の全面返還合意。代理署名裁判敗訴。「日米地位協定の見直しと基地の整理・縮小」を求める県民投票で全有権者の過半数が賛成	1995 阪神淡路大震災。オウム真理教事件
1997	米軍用地特措法改定で強制使用の期限切れ後も暫定使用が可能となる。名護市住民投票で海上基地反対票が過半数を占める	1997 拓銀、山一破綻。ペルー日本大使公邸事件武力で解決。香港中国返還
1998	海上基地知事建設予定地にジュゴン確認。名護市長選で基地容認候補者が当選。知事選で保守派候補者が当選	1998 アジア経済危機が世界に波及 長野で冬季五輪
1999	米軍用地特措法再改定。	1999 新ガイドライン関連法成立。盗聴法、国旗・国歌法成立
2000	沖縄サミット開催。「琉球王国のグスク及び関連遺産群」が世界遺産。 在沖海兵隊兵士による女子中学生に対するわいせつ事件発生。 普天間代替施設の建設工法などを検討する第一回代替施設協議会。 第8回協議会で辺野古中心地から2.2Km沖のリーフ（環礁）上と決定。 那覇空港―首里間に沖縄都市モノレール（ゆいレール）が開通	2001 アメリカ911同時多発テロ
		2002 日韓ワールドカップ・日朝首脳会談
2003	沖縄国際大学に米軍の大型ヘリが墜落。普天間基地返還要求強まる	2003 イラク戦争
2004	鳩山内閣、県外移設断念。内閣総辞職。	2004 新潟中越地震
2010	政府による尖閣諸島国有化	2005 郵政民営化
2012	普天間飛行場をキャンパスシュワブ沿岸へ移すための作業が始まる	2011 東日本大震災。福島原発事故
2014	翁長知事、辺野古埋め立て承認を取り消し	2013 秘密保護法強行採決
2015	女性を殺害したなどの容疑で米軍属の男を逮捕	2015 安保法制強行採決
2016	名護市で米軍のオスプレイが大破	2017 共謀罪法強行採決
2018	翁長知事の死去に伴う知事選で辺野古基地反対のデニー氏当選	

資料④ 軍隊、そしてわたしたち—あなたはどうかつきあいますか？(1)

*嬉野京子さんから沖縄を考える資料として「新沖縄フォーラム」の『けーし風』掲載のシンポジウム記録「軍隊、そして私たち」をご紹介いただきました。

新沖縄フォーラム

状況に「返し風」をかじ

はーし風

〈季刊〉 2008.12 第61号

特集1 戦争と軍隊を問う

特集2 環境破壊とたたかう人びと

《シンポジウム》 軍隊、そしてわたしたち—あなたはどうかつきあいますか？

アレン・ネルソン (元海兵隊員「Veterans for Peace」[反戦元兵士の会] 会長)

ダグラス・ラミス (政治学)

高里 鈴代 (基地・軍隊を許さない行動する女たちの会) 司会 新垣 誠 (沖縄キリスト教宣道大学教員)

司会 佐藤 学 (沖縄国際大学教員)

第一部

アレン・ネルソン

こんにちは。みなさん、今夜はどうぞよろしくお願いいたします。はじめに一言謝罪したいと思います。この機会を沖縄戦で命を失った子どもたち、女性、全ての住民に捧げたい。沖縄戦の三ヶ月で起こったことは私たちの想像を超えるものです。何万人もの沖縄の人が、米軍と日本軍の狭み撃ちになって犠牲となりました。今から「アメイザン・グレイス」という曲を、アメリカの軍人のコスベルのスタイルで弾きたいと思います。

* (ギター弾きおわり、大きな拍手)

最初迎えて沖縄に来たのは一九六六年でした。ベトナムに行く途中、若い海兵隊として。私は高校生の頃より、海兵隊のブートキャンプ(新兵訓練所の通称なキャンプ)で、沖縄のことを学びました。海兵隊と言ったのは「沖縄はアメリカにとって大きな戦利品だ」ということ

です。沖縄戦でいかに多くの子どもや女性たちが殺されたかは教わりません。習うのはいかに大きな戦利品かということだけでした。

一九六六年、私たちは沖縄を「ロック(若)」と呼んでいました。私は沖縄に来たとき、とても誇りに思っていました。なぜなら、私は非常に楽しい生活をしていました。日本、そして沖縄に来るとは、私の夢が叶ったことだと思っていたからです。軍隊に入り、沖縄に来ることで、私は分室のようなスラムの生活から脱出したのです。キャンプに入ると(金銭制)に転換したとき、そこにはゴキブリもスズメもいなかった。真実はそこにはありませんでした。キャンプに入るとは一日三食食べることができました。お風呂もありました。建物がアイルランドのようであることが多かったのです。

一九六六年に沖縄に来たとき、私は沖縄の「人」を覚えていません。私はあなた方の顔を覚えていません。あなた方の顔や三線を感



きませんでした。ゴーストも食べませんでした。チーズバーガーを食べ、コカコーラを飲んでいました。沖縄はまさにアメリカのような場所でした。今でも沖縄に来る米兵たちは、沖縄を「アメリカ」だと見ています。

みなさんは、日本の他府県の人々と同じように、アメリカの軍隊はみなさんを守るためにここに来ていて、信じていることだと思います。しかし、アメリカの軍隊は、皆さんを守るためにここに来ているわけではありません。アメリカ軍は「アメリカの基地を守るために」ここにいるのです。

9. 11のあと、私は日本にきました。東京で五つの高校を訪問しました。その全ての高校が沖縄への修学旅行をキャンセルしました。東京の保護者たちは、自分の子どもを沖縄に行かせることに不安を感じていました。なぜなら沖縄にはたくさんの米軍基地があり、テロが起きるかもしれないと思つたからです。沖縄をキャンセルした子どもたちが替わりに行ったのがアイスランドだったことに、私はショックを受けました。

9. 11のあと私が沖縄に来ました。そこで、まさしく今こそ沖縄を訪問するのに最高の時だと思いました。米軍基地の周囲の危機管理はとても厳しいものでした。すべてのトラックは海兵隊と大によって検査されました。すべてのゲート前に米兵が立ち、基地を固く守っていました。その危機管理は枚も入れないほど徹底したものでした。しかし、みなさんの住んでいる地域を訪れると、そこでは何の危機

もな沖縄を想像できますか。暴力、そして戦争から自由な沖縄。もしみなさんがそれを想像するならば、それは実現するはずですよ。一九六六年以来、私は何度も沖縄に来ています。その頃、一二歳の少女が三人の米兵に暴行される事件があつたからです。そして一九六六年以降も、たくさんの沖縄の女性が米兵に強姦されてきました。何も変わっていません。変化をもたらすことができるのは、唯一、あなた方です。ここはあなた方の島です。みなさんの沖縄です。ここはアメリカのものではありません。ここは日本政府に属するものでもありません。ここはみなさんに属するものです。みなさんは、みなさんの子どもたちのためにも、この島を安全なものにする必要があります。

私は多くの日本国民、そして仏教者、多くのクリスチャンと一緒に仕事をしています。そして沖縄の米軍基地に来て、何度も抗議活動をしています。何通もの手紙をアメリカ議会に送り、早くこの沖縄の米軍基地を閉鎖するようお願いしてきました。早く米軍に、武器、戦車を持って本国に帰ってほしいと願っています。第二次世界大戦はもう終わったはずですよ。私たちはそろそろ、沖縄戦を本当の意味で終わらせる必要があります。そろそろ、沖縄の人々が平和に暮らす日々が来てもいいはずですよ。そろそろ、米軍による沖縄支配が終わりになつてもいいはずですよ。これは簡単なことではありません。だけど、想像できますか。基地のない沖縄を想像できますか。フランス人がゴーストを食べに来るのを想像できますか。ドイツ人が来てエイサーをあなたと踊りに来るのを想像できますか。イギリス人が泡盛を飲みに来るのを想像できますか。アメリカの子どもたちがみなさんの子どもたちと遊びに来るのを想像できますか。

管理もされていませんでした。みなさんの公立学校を守る安全対策もありませんでした。みなさんの行政の建物を守る安全対策もありませんでした。テロリストからあなた方の生活を守る安全対策もありませんでした。もしそのとき他府県の修学旅行生が沖縄に来ていたならば、まさしくアメリカの軍隊はみなさんを守るためにはないことに気づいたはずですよ。

これはとても大切なことです。なぜなら、いま沖縄においてみなさんはまさに十字路に立たされようとしているからです。多くの沖縄の人々、とりわけ若い人々は、沖縄の将来について考えるときが来ていると思います。なぜなら、沖縄に米軍基地があるかぎり、あなた方に未来はないからです。沖縄戦はまだ終わっていません。勝者となるのは一人しかいません。沖縄の人々、もしくはアメリカの軍隊です。ここ沖縄では、あなた方は生まれたときから基地に囲まれた状況で育ってきました。みなさんは、米軍機が頭の上を、学校の上を飛ぶ状況に生まれてきました。みなさんは、高速道路で大量破壊兵器が運搬されるような状況に生まれてきました。これは正常ではありません。日本には、みなさんがここ沖縄で見ていることを、見たことがない多くの子どもたちがいます。

ジョン・レノン「もしみんなが望めば戦争は終わる」と言いました。みなさんは終わらせたいですか。みなさんは、米軍のいない、そして自衛隊のいない沖縄を夢見ますか。みなさんは軍隊から自由になった沖縄を想像しますか。みなさん、それを想像してください。歩いていて米軍にどこに行くと指示されない沖縄を想像してください。朝起きて「まだ沖縄の少女が強姦された」というニュースを見ない沖縄。そういう沖縄を想像できますか。みなさんは自

世界中の人々が沖縄に来てあなた方の文化を共有するのを想像できますか。世界にとつて沖縄はとても重要な場所なのです。

しかしみなさんが努力しない限り、この沖縄が自由になることはありません。そしてそれには大きな犠牲がともなうかもしれません。マハトマ・ガンジーは、イギリスの圧制からインドを解放するために、自らの命を賭けました。何度も殴られ、刑務所に入れられました。キング牧師はアメリカをより良い社会にするために、自分の命を犠牲にしました。何度も殴られ、刑務所に入れられました。自由というものはタダではありません。みなさんは、自らのため、そしてそれだけでなく皆さんの子どもや孫のために、その犠牲を受け入れる準備がありますか。

私が一九六六年に沖縄に来たとき、私はあなた方の顔を見ませんでした。ここに派遣される若い兵隊たちは、みなさんの本当の顔を覚えていません。彼らは命令を受けてここにいるのです。彼らはここにいたいわけではなく、早く家族のもとに帰りたいはずですよ。それならば、彼らを早く家族のもとへ帰してあげましょう。

想像できますか、沖縄、基地から自由な沖縄。想像できますか。ドウモアメリカトリ。

ダグラス・ラミス

みなさん二人は、私はネルソンさんと同じように、海兵隊として沖縄に来ました。ネルソンさんと違って、私はベトナム戦争に行つたことはなく、戦争体験はありません。彼は一九六六年に沖縄に来ましたが、私は六〇年、彼の六年前に来ました。ベトナム戦争の始まる前のことです。



沖繩に来る前、沖繩についての知識はほとんどゼロです。知識はなかったけれど、沖繩についてのイメージ、間違った情報がありました。海兵隊の文化の中で、沖繩は大きい。みなさんは「沖繩の中の海兵隊」と意識していますけれど、「海兵隊の中の沖繩」というものもあるわけです。とても大きな存在です。その時代には、だいたい海兵隊の三分の一は必ず沖繩にいたわけです。二〇年間海兵隊のキャリアがあれば、何回かは沖繩に来る。私は三年間の義務期間の中で、二年間はアメリカにいて、三年目に沖繩に来ました。ヴァージニア州とカリフォルニア州の海兵隊基地にいましたが、その文化の中から沖繩のイメージが伝わってくるわけです。もちろんネルソンさんと同じように沖繩戦の話も聞くし、大勝利だったということや、ドキュメンタリーは何度も繰り返し見せられた。それだけではなく、「沖繩はスゴイ」と言われます。ある程度のウチナーグチを海兵隊は使っていました。ヴァージニア州でもカリフォルニア州でも「アキサミヨ」とか、使う人がいます。「Number 2」つまり「イチバン」の英訳も使っていた。

二つのイメージがあります。一つは人種差別的なイメージ。沖繩人だけでなくアジア人に対する人種差別です。海兵隊は前の戦争、そして前の前の戦争をアジアで行いました。つまり太平洋戦争と朝鮮戦争です。私は朝鮮戦争のあとに海兵隊に入りましたから、差別用語は「グーク」アジア人を区別せずに「グーク」と呼ぶのです。

士官学校でこの話を覚えていて。講師は裏でで軍用を隠す技術を教えています。木を切り集めてで車やテントを隠すとき、葉の緑の色が違わないで、逆さまにはしてはいけない。逆さまにすればそれを丘の上から見ている「グーク」は「ア、ソウ」と言うだろう。つまり「グーク」は日本語をしゃべるんだ。講師は特にそれを日本語だと分かっていたかどうかはわからない。もう一つ印象深いのは、カリフォルニアのキャンプペンデルトン基地内の食堂の壁に、大きなクロコダイルの絵がありました。アジア人が描かれているのですが、壁で下駄をはいている。中国人と日本人がこちらをまわす「グーク」なわけです。その人は海兵隊に乗っている人力車を引っぱっている。それはアジアに対する全般的な曖昧さ、抽象的な差別です。

沖繩に対して、もう一つの教えがある。沖繩戦では海兵隊はたくさん死んだ。死んで、この島を奪ったから、この島は海兵隊のもの。戦利品。戦争文化の中で、勝てば街の中のものを戦利品として持ち帰ってもかまわないわけです。沖繩はその戦利品だというイメージがあったわけです。

沖繩に来る前、海兵隊員とよくデートする女性と会って、彼女に言われました。「沖繩に行くんですか、じやあオネエサンたちに会えるんですね」。「オネエサン」と日本語を使うんです。「Yes, I meet ONEESANS」と。僕はその言葉を知らなくて、「それは何？」と尋ねると、「まあ、行けばわかるよ」。つまり、「戦利品」の中に若い女性も入っているのです。沖繩戦があったから、海兵隊は沖繩の若い女性を自分のものにする特別な権利がある。そういう文化なのです。

私たちは船で沖繩に来て、キャンプ・ズタランに入り、一日目に大きな会場に集まってオリエンテーションを受けました。キャンプの司令官が、沖繩はどういうところかを説明しました。いろんな具体的な説明の中でこういう話もありました。「沖繩には軍隊の数を越えるくらい売春婦がいて、海兵隊一人当たり一人の女性がいる。だから病気になるように気を付けよ」。「そういう場所に行くな」とは言わない。つまり沖繩にいる特権はこれだ、と司令官が言うわけです。表のメッセージは「気を付けろ」だけれど、裏のメッセージは「戦利品だよ」ということです。

「沖繩は戦利品である」という態度はまだまだ海兵隊の文化の中にある。その証拠の一つは、沖繩大のベリ座落事件で、海兵隊が普天間基地からフェンスを飛び越えて大学に侵入し、黄色いテープでふさぎ、沖繩警察、消防隊、宜野湾市長、新聞記者、誰も彼も追い出して入れようとしな。その夜、私は見に行きました。黄色いテープのどこまで行きました。海兵隊のMP（憲兵隊）が並んで銃を持っている。ネルソンさんもわかんないと思いますが、海兵隊が仕事で勤務している時には銃が入っています。MPは銃の威嚇で人を入れない。基地の外の人に対して警察権を使っているわけです。「私の命令を聞かないと、この銃で……」。銃を持った人に「二二に入るな」と言われると、その意味はわかりますよね。

次の日の新聞では、いろんな人が「地位協定がいけない」「地位協定を変えよう」という主旨の話をしていますが、地位協定にはそういうことをやってもいいとはどこにも書いていません。地位協定には、日本国民に対して警察権はありません。銃で脅す権利はありません。MPが基地の外で活用できることは一つだけ、米兵が基

地の外で問題を起こしているとき、警察当局に連絡して米兵を逮捕することはできる。それ以外はできないと、はっきりと地位協定に書いています。そうであれば、海兵隊の憲兵隊が沖繩大に入つて人を追い出す権利は、法的にもどこにもない。その行為は何と呼べいでしょう。国際法のもとで、軍隊が武器を持ち、よその国に入つて人を強制する。何と呼べいでしょう。「軍事行動」ですね。あるいは「侵襲」という言葉でもいい。もちろん、とても地味な、死傷者が出ないような行動ですが、それでも「軍事行動」です。鉄砲で威嚇することは、撃たなくても軍事行動です。どうしてそんなことができるのか。どうしてこれをやってもいいと思っているのか。「沖繩は自分の島だ」と思っている、その伝統、考え方が残っているからです。

海兵隊はこの島を戦争で取った。そして復讐のとき、とりあえず基地の外を形式的に日本に返したけれど、基地の中は変わっていない。相変わらず戦利品。でも、沖繩大の事件でわかるように、やはり基地の外も相変わらず戦利品。いざというとき、勝手に自由に意思的に動くということがわかったわけです。島をどのように使うかはそれでわかる。今のところ米軍は沖繩から遠いところの戦争に出かけています。朝鮮戦争、ベトナム戦争、イラク、アフガニスタン、フィリピンにも行く。近いところで戦争はなかった。つまり相手が反撃するくらい距離の戦争はなかったことがない。もし反撃する、とができる国で戦争が起これば、米軍は地位協定と関係なく、沖繩全土を自由に使うことになると思います。

だから、ネルソンさんがおつしやるとおつ、彼らが二二にいるから安全とか、暴力によって殺される可能性がへることは一切ありま



高里 純代さん

せん。とても危険な存在だと思えます。

みなさん、こんにちは。私はキリスト教学院が二つに立派な建物になる前、最初の頃の小さなキリスト教を卒業して、一九六一年から

六三年までの二年間フィリピンで勉強しました。ちやうどラミレスさんが沖縄にいらした頃ですね。最初の年のクリスマスに友人に誘われてオロラガボ市に行きました。友人の家から少し出て街に行くと、沖縄に戻ったのではないかと思うくらいに、雰囲気や匂いが、街にあふれている米兵も着服も、沖縄の基地の街、コザの街とそっくりでした。そこはアメリカ海軍の海外で最大の町でした。本当に沖縄と共通していると感じた経験を六〇年代にして、沖縄に戻ってきました。

私は四〇代になって那覇市の婦人相談員を七年間経験しました。一九八〇年代のことです。ベトナム戦争が終結し、アメリカはこれまでの徴兵制が志願制に変わりました。沖縄は本土に復帰し日本国になり、従来の米兵が基地から出てドルを使っていたときからは経済状況も変わってきたときに婦人相談員になったわけです。女性たちの相談を受けるようになり、四〇代、五〇代の、ベトナム戦争当時基地の街ですつと働いていた女性たちが共通に語るのには「レイプされた」「絞め殺されそうになった」という言葉でした。

一九六九年に行なわれた最初で最後の調査で、当時沖縄では約七

のです。

沖縄戦は「たまたま一撃に一撃の砲弾が降った」くらいの軽い状態が三か月続き、その砲弾の音が止んでようやく戦争が終わったはずなのに、今度は無差別の女性に向かう暴力が始まりました。戦闘が終わって、米軍からすれば「勝利」したそのときから、軍隊はそのまま二二にいる。収容所であろうと野戦病院であろうと、あるいは何人か連れ立って洗禮に行った川のそば、あらゆる場所で、九カ月の赤ちゃんから六〇代の女性まであらゆる年代の女性への、そして女性だけではなく男性への暴力もずっとあったんです。

一九五〇年九月、そのような暴力があまりにもひどいので、嘉手納基地周辺の地域のリリーダ、警察署長や保健所長などいろんな人が集まって、このような暴力を防ぐにはどうすればよいか話し合った結果、嘉手納基地内の一部を返還し、米兵を相手に働く女性たちを置いて、性病検査を義務づける場所にした。そこが沖縄市の八重島です。八〇年代半ばには沖縄市の高校生たちが自分たちの街の歴史を調べたレポートには、この八重島のことを「一九五〇年九月、米兵たちの楽しむ場所が一足早いクリスマス・プレゼントとしてできました」という表現で書かれていました。私は、指導をした先生にもつとものと事実を伝えてはしなかった。いったん基地として接収したのを戻してでもそういう場所を作らざるをえないほど、そういう暴力があったんです。

では今はどうか。よく「沖縄に在日米軍基地の七五パーセントがある」「沖縄本島の二〇パーセントが米軍基地である」と言われますが、そういう表現は正確ではないと、最近の私は思うようになりました。タッチ・アンド・ゴーや夜間演習の機音はフェンスを越え

四〇〇人の女性が飛艇につながっていたという数値があります。八〇年代にはその場所からは離れている四〇代、五〇代の女性たちが、ベトナム戦争当時は米兵に絞め殺されそうになった、夜中に寝ていたら突然首を絞められたとか、殺されそうになった、レイプされそうになった、ある女性は隣女に連れて行かれてレイプされ、ウィスキー瓶を割って殺そうとするので、道から飛び降りて逃げ一晩中歩いてやつと帰ってきた。その時、彼女は一歳になる赤ちゃんの写真を見せて、「あなたがしたことは誰にも言わない、秘密にしておくから、自分を無罪に帰してほしい、赤ちゃんがいるの」と言っても、相手は聞き入れずに車でひき殺されそうになる。彼女はその後、相手に会うかもしれないからと、そのことを一切秘密にしていた。こういった話を、一人ではなく何人もの女性から聞くんです。しかも、危険な目にあったのは一度ではない。一人の人が複数回そういう被害にあうのを聞いて、なぜこんなにも女性たちが訴える被害が共通なのか、これは一人の兵士の暴力という問題ではなく、兵士たちの中に共通してある問題ではないかと思うようになりました。

一九六六年から「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」として、戦後ずっと起こってきた事件を造字になったものだけでも振り返り起こして時系列に並べた年表を作りました。ベトナム戦争当時、沖縄では一晩で何人もの兵隊を相手にする被害もありますが、同時に、一年間に二人から四人の女性がレイプされ絞め殺されて横で腐に捨てられる事件が、新聞に載った事例だけを調べても出てきます。ホステスをしている二〇代、三〇代の女性が被害にあっています。沖縄とベトナムがつながっていて、ベトナムへ行く前あるいは戻ってきた兵士たちの怒り、フラストレーションが、地域に及んできた

て飛び出しています。

また、基地のゲートには「二二は嘉手納基地との境界線です。許可なき者の出入りを禁ず。司令官の命による」という立看板、どのゲートの前にもあります。日米地位協定のもとで提供される区域となっていて、そこで保護されているのは完全な演習と、駐留する軍人、軍属、子どもの教育も含めてその安全な夜を保障されていて、しかも彼らはいつでもどこでも出て行ける。地位協定の中では入管法も免除されて、外国人登録も一切免除されて自由に外に出て行けるわけです。それに対して、もう一つのゲートはない。つまり、二二は沖縄地域との境界線です。許可なき者の出入りを禁ず」というゲートはなく、いつでもどこでも自由に出て行けるなかで暴力が起こり続けています。この島は全部基地なんだ、自分たちは沖縄の軍事基地の面積の中だけに駐留するのではなく、沖縄の島に駐留している、戦利品として獲得したのはこの島全体であるということなんです。

そうした中で軍隊の暴力性とは、相手に知る差別という二重攻撃を絶えず加え直されることです。ベトナム戦争の帰還兵ローン・コビックが「七月四日に生まれて」(日本版「七月の美しい朝」という本を書き、これは映画にもなっています。彼は海兵隊になった。海兵隊員が学校に来て、その制服のズボンはまっすぐな折り線が格好いい、行進しているのも格好いいと思つて海兵隊に入るとまっすぐ言われたのが、「二二に集まったさす十八八〇人、これから徹底的に殺してオトコにしてやる」という上官の第一声です。徹底的に訓練を受けて誇り高られていた人間性、その中でベトナムに行き、命令に従つて闘い、足に砲弾を受けて初めて我に返つて「人間を取

り戻した」という表現があります。兵士になっていくプロセスの中で、「彼」とみなす相手を人間とは見ない、非人間、モノとして見る。戦闘能力を身に付けていく訓練の中で、相手に対する差別。その中で知性差別、そして軍隊の規律に最優先に従う体質を身に付けていく結果、地域に対する暴力も起こる。米軍内部でも、女性兵士に対する性暴力についてたくさんの訴えが出ています。兵士の家庭内暴力は一般家庭よりも四、五倍多いという報告が出ています。そういう暴力性が、むしろ評価され鼓舞される組織が軍隊です。それが沖縄にこの六三年間ずっとあり続け、いつでもどこにでも出て行くという環境が、この沖縄なのです。

第二部

佐 野 今日ぜひ議論したいと用意した質問が三つあります。三人が共通して語られたことは軍隊の存在が構造的な暴力であることです。ネルソンさんは、このような形で軍隊が沖縄に居ること、そして基地の外にずっと出ているということ自体が、普通ではない状況なのだとおっしゃいました。一方、普通ではない状況にもかかわらず、特に基地所在市町村に行けば、米兵がたくさん街に出ていて、彼らとつき合う日本人の若者がたくさんいます。ここで語られた認識が共有されていない、伝わっていないわけです。それをどのようにすれば伝わるのか、あるいは伝えるべきなのか、私は悩んでおります。それはまた「良き隣人政策」にもつながります。米兵が、あるいは米軍が、沖縄の社会に居ることに対して、沖縄社会はどのように対応すべきなのか。「良き隣人ではない、拒絶すべきである」と言ったときに、それが説得力を持って受け入れられるのかという

不安があるわけです。どのようにすれば説得できるのかということですね。

二つめは、ラムスさんがおっしゃった地位協定の問題です。このシンポジウムが企画された理由に、二月の事件の問題がありました。地位協定の抜本的改定ということが要求されているわけですが、今回の事件に関しては、地位協定は実はあまり関係ないわけです。釈放してしまったのは日本の司法で、日本の警察が逮捕したものの、日本の法律に照らして立件できないということで日本の司法が釈放してしまった。むしろ日本の法律の問題、女性に対する性暴力の法律の問題です。地位協定の抜本的改定を言うことによって、本当の問題から眼を背くことになってはいませんか。不十分ながらも裁いたのはアメリカの軍法会議であって、日本の裁判所は裁けなかった。これはまあたしかおかしな話だと自分は思っているのですが、これをどのようにすべきかが二つめです。

三つめは、街づくりのあり方についてです。米兵の存在が核的な魅力として打ち出されている街づくりとはどんなものなのか議論したいと思います。二月の事件で少女が連れ去られた「ミュージックタウン」は、島田郷事業という基地周辺の活性化事業として作られました。沖縄市がやっている事業です。そこで少女が連れ去られたわけです。ミュージックタウンの宣伝をみますと、これは明らかに米兵の存在が街の魅力として謳われているとしか考えられないような宣伝がなされています。これはどうなのかと、自分はずっと疑問に思っていました。

では最初の「若い人たちにどう伝えるか」について、意見をお願いします。

ネルソン 私が軍隊と仕事をしながら学んだことは、満ち足りた幸福な人は軍隊に自ら進んで行きたいとは思わない、ということですね。すでにキャリアを持ち、いい大学に行っている人たちは、あえて今持っている豊かなものをあきらめて、軍隊に入って沖縄に来ようなどとは思わない。自衛隊を見てもらいたいです。彼らは自分の人生に満足しているからです。彼らはいい企業に入り、たくさんのお金を稼ぐでしょう。みなさんは、沖縄の米軍基地でハーバード大学を中退して海兵隊に入つたという人に会えることはまずないでしょう。軍隊はおおむね、自分の人生で不幸を感じている人たちに成り立っているものです。彼らは仕事を見つけたことができます。彼らは貧困から抜け出そうとしています。雇用のないところから彼らは来ているのです。米軍は、そして自衛隊も、すべて自分の意思で入隊することになっています。しかし私たちはこれを「貧困の徴」と呼んでいます。貧しい子どもだけが入ってくるからです。

私は、沖縄の若い女性たちが米兵とつき合うのは社会的なプレッシャーから抜け出す方法ではないかと考えています。多くの沖縄の女性たちは、この風を出たいと思っているのかもしれませんが、この島には、あまり仕事も機会もありません。アメリカはまるで夢の、デイズニランドのような場所です。彼女らにとっては、沖縄や日本本土よりもっと機会に溢れた場所として、アメリカが映っているのだと思います。多くの沖縄の女性たちは、米兵とつき合うことが非常に格好いいと思っているのですが、同時に、この沖縄の社会を出て行きたいと思っているのかもしれませんが。

先日私はミュージックタウンを見て非常にショックを受け

ました。そこは私が思っていた沖縄ではありませんでした。まるでひとアメリカにいるようでした。そこにはたくさんの若い米兵と、たくさんの沖縄の若い女性がいました。私はいつも若い米兵たちに語りかけます。彼らのほとんどが一八、九の若者で、初めてアメリカ国外に出てきた者です。彼らは恐れていて、しかも孤独を感じています。彼らは沖縄の歴史も知らないし、ほとんど教育も受けていません。私は父親のように彼らに話しかけます。元海兵隊なので、彼らに軍隊用語で話しかけることができます。アメリカのどこから来たのか、どのくらい沖縄にいるのか、そして沖縄は好きかと訊きます。共通した答えは「故郷に帰りたい」というものです。

バーの中から、数人で、酔っ払った米兵が出てきます。人種差別や人を嫌う気持ちに溢れています。そして彼らに寄り添っているのが、イノセントな、アメリカ文化に憧れている沖縄の女性です。多くの若い米兵たちにとって現実には、彼らはアメリカ本国では女の人たちとつき合うことができない。しかし沖縄に来た瞬間、三、四人の沖縄の美しい女性たちが彼らに「つき合いたい」と寄って来ます。彼らは非常に力があるように感じます。「二つに一つ」と米兵が沖縄の女性に命令しているのを見ます。彼女はそれに従います。この沖縄社会で最も危険なのは、アメリカ文化について全く教育されていないということです。米兵が基地から出てくるとき、彼らは教会に行くわけではありません。賭博、セックス、ロッキンロールそしてジーザス、それがアメリカの文化です。

私はミュージックタウンの周囲を歩いて泣きそうになりました。沖縄の若者たちがお金をむさうているのです。たくさんの女性たちです。私は彼女たち一人ひとりに話しかけ、そして自分の持つ

ているお金をあげました。沖縄のひとが自分たちの島に住みながらアメリカ人にお金を与えている姿に、とても驚きました。アメリカではたくさんのアルコール中毒や薬物中毒の人がお金を与えます。しかし、ミュージックタウンのお年寄りたちは、アルコールでも薬物中毒でもありません。彼らはお腹をすかせていました。

その後、私は泣きやむことができませんでした。どうしてこんなことになっているのか。そのお年寄りたちは、かつては皆さんのように若い人たちでした。それが年をとって、街角でお金を乞うようになっているのです。米軍基地は沖縄社会にとって毒であり、これ以上ここにいてはならない。ミュージックタウン周辺は沖縄ではない。アメリカの一部であり、アメリカ文化の一部です。ミュージックタウンに沖縄の若い人が遊びに行くのは、とても危険なことだと思います。もしセックスしたいのならそれはオケイかもしれませんが、もしも米兵がみなさんと結婚して、みなさんをアメリカ本国へ連れて行くと考えているならば、それは間違っています。米兵の両親は、みなさんを受け入れないでしょう。近所の人びとも、アメリカは地球上でも最も人種差別の激しい場所です。みなさんはアメリカに行くこと「黒人」になり、黒人のように扱われます。

私は教育がとても大切だと思います。沖縄では中学生から米軍基地や米兵に対する教育をもつとすべきだと思います。基地は暴力に飽きません。基地の中で軍隊が直面している最大の問題として、家庭内暴力があります。基地の中には孕を受けた女性たちが駆け込む場所があります。軍隊は暴力なしには存在しえません。

高重 ネルソンさんのお話は、その通りだと思います。沖縄は六三年間基地があり、かつてはフェンスの向こうには銃剣を突きつけ

て軍用犬も一緒に住民と対峙するような構図がありました。八〇年代になるとフェンスの後ろには束竹柵が設置されて、銃が構えて、銃剣を持って軍用犬で威嚇するような構図はなくなりました。八〇年代の始めといえればベトナム戦争も終わり、徴兵制もなくなつて定期的に変わります。

八一、二年でしたか、老朽化した金網のフェンスを折り曲げた所から女子中高生が基地の中に連れて行かれるということが起こって大変問題になり、教育関係者も大変ショックを受けました。そのとき、「アイトからだつて女性たちが米兵と顔を重ねて入っていくじゃないか」という記事が出ました。そのうちに、米兵を好きになる女性たちを「アメジョ」とか「黒ジョ」と呼ぶ、「ジョ」とは女性ではなく「アメリカ・ジョーグ」で、アメリカが好きだから「アメジョ」、黒人が好きだから「黒ジョ」、などという言葉が出てきました。

二〇〇一年六月、北谷の駐車場でひどいレイプ事件が起こったときには、裁判で加害者米兵の弁護士が、被害にあった女性も、そのような人ではないかとその言葉で言及している。もう一つ、その事件では、駐車場でしゃがみ込んでいた女性は、彼女の腕を持ち上げた相手の車に間違つて入ってしまったんです。全然合意ではないことを、加害者が最後まで「合意だ」と主張し続けるあの強さは、この米兵はこれが初めての犯行ではないと思えるものでした。誤って合意にしてしまうことが本当によく起っている。また、初めてであろうと誰であろうと駐車場でセックスするのは、「これはアメリカ文化だ」と加害者の弁護士は言うんですね。アメリカ文化を沖縄でもやるのか、という話になるんですが。

そうしたことがあちこちで起る状況があります。彼らと私たちの接点が本当に厚くなっているわけです。フェンスが壊れてしまうという状況や、関係がたくさんできて、沖縄の新聞の死亡広告を見ると、親戚の中にもたくさんいることがわかります。

また、米兵の持っているドルの力がとても弱くなった。初めて沖縄に来て、フェンスの外に遊びに行く、デイスコに行ったら最初のビールは、客寄せのために「タダでいいよ」と言われます。最初に会った女性にも、「君の目はかわいいよ」ととにかく褒めちぎる。女性のほうは、そんなことを言われたことがない、片言の英語しか話せない自分にそんなことを言われて、つき合いが始まるわけです。そして、今は、ファーストフードの店なんかでも、女性のほうが支払っていますね。米兵は金欠で、キャンプベンセンの向かいの町ではタコライス玉五〇〇円がギリギリ払えるところで、できればそれ以上は払いたくないし、できれば女性に払ってもらいたい、というような態度になっている。そのようななかで、なんとかタダのセックス、タダの関係を求めていくんです。

九五年の事件の後、軍の保護を米兵も払う義務を初めて負うようになったのです。お金がなくて女性からお金を借りて、返さないままにアメリカへ帰った者、あるいは「は別居で二カ月いなくなる、二カ月後に電話するから」と女性に告げて、実は別居ではなくて帰国していたというケースもありました。なぜそういう関係ができるのか。接点が厚いのに加えて、もう一つは「身近なアメリカ」。例えば英語ですが、このギリギリから英語研修でアメリカに行つて来たら、自分の英語力をなんとか維持したい、米兵をボーイフレンドに持てばある程度維持できるのではないかと、そういう思い。あるいは映画

などでも、外国映画は圧倒的にアメリカ映画だというような文化の中にあつて、この接点の厚さがあります。ネルソンさんが言うような軍隊についての教育が全くない中で、むしろ国際協力、国際理解の推進が強調され、英語学習は素晴らしい、だから自分の英語力を試すことは何も非難されるべきことではない、などというメッセージが、日ごろの環境から構造的に出てきているのです。

米軍は沖縄での駐留をいかに受け入れさせるか、何の抵抗もなく受け入れさせる環境をどう実際に作っていくかをやっています。例えばボランティアの英語教師としてとんとん小・中学校に来る。小学校側が「いや、報酬を払えない」と言うので、「感謝状だけでいい」と言う。感謝状を年末に何枚も書いたという先生もいました。徴兵隊のホームページには、地域活動への貢献として、施設訪問、清掃作業をやった、英語教師のボランティアをやった、などと書かれていて、地域活動は軍の方針として実際に書かれています。

若い人にとり伝えるかということですが、「米兵とつき合っています、いい出会いがあつて、愛し合っているんです」と言われたならば、私は言いますね。「彼のフルネームを覚えておくこと、セキユリタイ番号も覚えておくこと」。好きなときはいいけれども、いざ相手がなくなつたときに、本名も知らない、確認したくても電話がつながらない。二で結婚している方でも、セキユリタイ番号だけは、結婚許可証やなんかのときには必要だと言われるくらいです。出会う機会がとても多いこと、しかし、あまりにも相手について正確な情報を知らなさ過ぎること。ものすごいリスクを受け続けているのです。結婚しアメリカで子どもが生まれても、離婚して戻ってくるなどのたくさんのケースがあります。

実際に、沖縄の社会が受け入れるようになってきたこの環境を、もう一度問い直すことも必要です。つき合う人を求めることはできない。環境そのものを問い直すのです。

ラミス 私が言えることはお二人がだいたい言われましたが、一つだけ。今思い出したのは、海兵隊に入つて二年ぐらい経つたときのことです。沖縄に来る前ですが、僕と結婚したいのかもしれない女性とデートしていました。その時に自分のルールを決めたんです。絶対に、海兵隊にいる間は結婚しない、と。海兵隊と結婚する女性には信頼しません。趣味が悪いし、それだけでなく、海兵隊の持つアメリカ帝国のアウラ、制服についての何らかの力があるわけで、それは私ではないということがよくわかった。それをわからない海兵隊員が結婚すると思います。アメリカ帝国の力を自分の力だと思つて「自分は強くなつた」と思つてしまう。私は「それは私ではない」と気づいたから、そのアウラに魅力を感じた女性が私と結婚したら、私が海兵隊を辞めたらそのアウラは無くなるから、おそろしいことにはならないだろう。

ネルソンさんがおっしゃったように、もし沖縄の女性が、沖縄を出たい、アメリカに行きたいから結婚を求めて付き合うなら、結婚したとしても、差別のアメリカに帰るわけです。家族が受け入れるかどうかかわからないし、周囲が受け入れるかもわからない。それだけでなく、男のほうが、沖縄にいる間はとてつもなく真剣に付き合っているつもりでも、一八、九の男の「真剣」はどのくらいなのか。アメリカに帰ったら、本人が変わります。たぶん、ほとんどの人が。アメリカに帰つてきて周囲が差別のままなので、「ああそうか、私はこの町の人の人なんだ」と、その町に合わせて、一時期忘れていた差別

別が自分の心の中で復活するのです。事実として、そういう結婚は、うまくいく場合はありますが、多くは離婚に終わるという統計を読んだことがあります。

二月の事件の女性がバイクに自分の意思で乗つたこと、すこしバイクシフトを受けました。読売新聞までが社説で、女が悪い、なぜ米兵を信頼するのか、米兵を信頼するバカがいるか、と書きました。米兵を信頼する女性とはどれだけバカかという手紙がどんどん出てきた。しかし、信頼するような教育が沖縄にはある。「良き隣人政策」です。これは米兵のプロパガンダなのです。「米兵は信頼できるものだ」と学校で教えるようとしていたわけです。積極的に米兵を学校に呼んで英語を教えてもらう。「いい人でしょ？」と先生たちが生徒に教えているんです。「なぜ信じるのか」という答えがそこにある。信じてもいいのだということ、沖縄の学校制度の科目としてあるわけです。だから、学校は共犯者です。信じる人が悪かだというなら、信じている先生たち、信じてお世話をする先生たちは何なのか。良き隣人政策をまず根本的に考え直さなくてはならない。ネルソンさんがおっしゃるように、信じるような教育制度ではなく、信じないような、あるいは注意するような、変なような教育が必要なんですよ。

ネルソンさんが最初に「想像できますか？」と伝えました。高麗さんは、ゲートの前にもう一つのゲートはないじやないかと話しました。それを聞いて、ある想像が浮びました。僕はカリフォルニア出身で、その州にはメキシコとの国境があります。国境にはゲートが一つあります。この国から出た、そして一〇メートル歩いたら、次の国に入るのには別の手続きです。全ての基地のゲートの前にも

うひとつのゲートがあるとして。入国料は……どれくらいにしましょうか、一〇〇〇円？ そして空港のような金属探知機を通し、反応があつたら調べ、荷物はすべてX線検査を通す。何か変な物が入っていないかチェックし、目的を書ける書類もある。そういうような想像をしましょう。以上です。

佐藤 ありがとうございます。ラミスさんが最後におっしゃったことが要求できないような現状が、この問題の解決が難儀なことの証拠なのだろうと思います。「米兵は夜出てくるな」と要求できれば簡単なのでしょうが、それが言えない構造になっている。

次の問い、日本の法律では暴行が親告罪であり、被害者が取り下げれば犯罪にならない。これがいかに大きな問題か、米兵の犯罪に限らず、性犯罪、暴行罪に対する日本の法律自体がおかしいのではないかと自分は思っているわけですが、それを変えようという議論にならない。この問題についてお話いただけますか。

高麗 二月の事件で、被害者が訴えを取り下げて不起訴になりました。一週間後に起こつたフレイレン女性被害にあった事件は、証拠不十分で不起訴になりました。今回、米軍は本格的に「軍事法廷をやっています」とメディアも呼んで公開しています。広島で起きた岩国基地の海兵隊員によるレイプ事件も、証拠不十分で不起訴になり、軍の法廷で裁かれて、被告の四人は一年前後の刑が決まりました。不起訴になる、取り下げるというケースは本当に多いのです。今回はクロイミアアブされましたが、九五年以降も、事件の取り下げがあつて軍の中での裁判がされておき、米軍は「自分たちはちゃんとやっている」と示すために、かなり厳しい刑を科しています。けれども、だいたいは司法取引をして軽い量刑になっている

のが現状です。アメリカの軍隊の中でも、自分たちの兵士間で起きている性暴力に関しては処分がとてつもなく甘くて、ほとんどが不起訴どころか問題にすらされない。やつと起訴されて刑事事件になつても、軽い刑にされる。軍隊の中では、性暴力は優先順位が低く、重大な問題ではないのです。

日本の凶悪犯罪でも、被害よりも加害者が軽い。集団強姦についてはやつと重くする規定ができましたが、日本の強姦罪は一〇〇年あまり改正されていない古いものです。その矛盾を抱えている土壌にあつて、今度は軍隊が駐留している中で、地位協定はものすごく問題で、地位協定の不平等さが全然是正されないまま運用改善だけでよいといながら、七五パーセントも基地が集中している沖縄の人がもつともこの矛盾を受けているわけです。

地位協定の問題、強姦罪という法律の問題の上に、さらに、社会全体が持つている被害者に対する非難、裁判になつても、とても厳しい「セカンドレイプ」と言われるような状況がある。このことを、沖縄連出の三人の議員が国会で質問主意書で問いただしています。被害者のプライバシー保護がどうなっているのか、被害を訴えたあとの精神的なサポートがどうなっているのかを質問したら、政府の答弁は、各都道府県の精神衛生センターなどの施設でやっています、と実にいい加減な答えをしています。それから見ても、訴えることの困難さや、特に米兵による事件では、訴えた後の、政治問題化される時の大きなギャップがあります。訴えることのできるシステムをどう作っていくかということですよ。

佐藤 今回の問題に関して、被害者の意思に反して長時間の拘束を受けたこと、身体を触られたこと、これは米兵も認めていること

で、にもかかわらず、なぜ立件できないのか。アメリカであれば、拘束していることそのものが、しかも一四歳の相手であれば、重大犯罪です。日本の司法はそれを釈放してしまった。その根本問題である法律自体を変えようという話にならないところが、私は、おかしいと思っています。

さて、三つめの質問、ミュージックタウンの問題ですが、二月の事件の後に、「基地共存推進会」という基地外の米軍の居住を推進するという方たちの団体が県に出した要請書があります。その中で、「もし軍人と家族が、報道されるような危険な野蠻人であるなら、誰も大事な不動産を彼らのために貸す事などありえないはずです。また、事件の現場となったコサ・ミュージックタウンが、彼らと呼ばせる広告宣伝をしたり、事件の現場となった北谷町美浜が、アメリカン・ビレッジと名づけて彼ら好みの街づくりをするわけがありません」と主張しています。

こういううちに、ミュージックタウンやアメリカン・ビレッジという街づくり自体が、米兵は良き隣人である、あるいは基本的には善良な人々で、彼らを迎え入れることが街づくりの核としていることと、米兵が、彼らの存在は危ないという証拠に使われているわけです。街づくり、都市計画、地域産業のあり方として、ミュージックタウンのホームページの「コサつてどんなところ？」という文庫には、アメリカ、そして多国籍文化が薫るインターナショナル・シティであり、キーワードとして「多国籍文化」「基地の街」「ドルで買い物」「チャンプルー音楽文化」とあります。音楽を推進する施設のはずが、そういうキーワードを出していることにとってもひっかかる。この問題についてどうお考えかがいいたいと思います。

という自覚があった。それは自分がそれ以前にもやったことがあるから、それとも周知から聞いたのかかわりませんが、とにかく彼女はしやべらないはずだということで、アパートの場所を教えずに安全だと判断したのでしよう。

高 里 ラミスさんの言う通りだと思います。もう一つは、これまで実際に表に現れて裁判になったことで推測できるのは、このことは初めてではない。事実上このような状況がこれまでもあったであろうと推測できるんです。

私自身は、強姦被害者の電話相談の仕事もしていますが、実際には、被害者は訴えないんです。妊娠していないかどうか、性病をうつされていないかどうかのチェックをして終わりです。もし妊娠していたら中絶をして終わる。あるケースは、留学が決まっています、黙って留学に行く、帰ってきたときに相手がまだ仲間にいるのではないかと不安で家から出られない。その方の相談は「相手がまだ仲間にいるかどうかだけでも確かめてほしい」というものでした。

表に出ているものの背後に、訴えない被害者が本当にたくさんあります。訴えない理由の一つに、「自分から基地の中に入ったから」というものもあって、英語を習うということと基地の中に入った、他の被害者にも行けど、自分から入ったために訴えても誰にも自分の被害を信じてもらえないということと声には出しません。声に出さない理由のなかにたくさんあることがあって、表に出たことがいかに限られた一部であるかということですね。

九五年の事件の加害者米兵の三人の会談で、「日本の女性は攻撃してもナイフや銃を持っていない、だから攻撃されて自分たちが死ぬことはないから大丈夫」「自分たちはみな似たように見えるから、

ネルソン 一四歳の女の子に起きたことについて、言いたいことがあります。この事件のことを、私は日本本土で新聞で読み、非常にショックを受けました。しかし同時に、メディアが彼女を再び被害者にします。メディアのカメラやマイクを避けて、家から一歩も出ることができません。日本社会、そしてメディアのメッセージは明らかに「もし彼女が日本女性、沖縄女性で、レイプされたのであれば、何もしやべらな、黙っておけ」というものです。家に帰ってシャワーを浴び、誰にもそのことを言うな、もし言えば、もう一度被害者になるぞ、と。確かに彼女は法的システムの犠牲になったかもしれませんが、しかし彼女は私たちの犠牲になったのです。私たちは彼女の人権を守らなかった。彼女の安全やプライバシーを保護する努力を、私たちはしなかった。私たちは、再び沖縄の女の子が強姦されるのを待たなければいけないのでしょうか。これは非常に重要な事件です。これは女性に対する暴力です。軍隊とは、常に、女性に対する暴力です。強姦するのは、軍隊の文化の一部です。もしこのような事件が起こるようなことがあれば、私たちは本当に気をつけなければならぬ。被害者の女性、そして家族を守るということ、を、私たち全員がやらなくてはなりません。

ラミス 今の話に小さな面影をつけたと思います。もちろん、この事件に関しては新聞に出ていたことしか知りませんが、そこに書いていたのは、彼女を自分のアパートまで連れて行き、そこで斬られて、「送ってあげる」と車に乗せて、車のなかで犯行におよんだということ。男性側からすれば、女性を強姦する意図があれば、まず自分のアパートがどこにあるかは教えます。どうしてそんな愚かなことをしたのか。これは推測ですが、彼女は絶対にしやべらな

面通しをされても隠匿はされないだろう」「日本人女性はレイプにあつても訴えないから大丈夫、現に、同僚はやっているが見つかっていない」などの会話を交わし、実際の行動に至っています。

あの事件のあとひどい発言がありました。マツキー・アジア太平洋地域司令官が「あの三人の兵士はバカだ、もしレンタカーを借りるお金があれば、女を買えばよかったのに」と発言して、アメリカ領土で問題になり更迭されました。あの発言を聞いて私は「ああ、ベトナム戦争を体験した司令官だな」と思いました。あまりにも自由にお金でレイプが可能だった時代の人です。今はそんなことはない。ですから、とても普通なつき合いのようになりながら、訴える側は、そこに自分の非があるように思わされて訴えることができない。今回の事件も、実に大胆に行なっていることの背後には、一度ではないということが予想できると思います。

佐 藤 ありがとうございます。何しろ、六三年間、本来的なべきでない軍隊が存在し続けました。その間、アメリカ政府、日本政府が、まともではないことを隠れさせるような、あるいは「地元は望んでいるんだ」という形をつくることをずっとして、新しい基地にして、米兵にして、地元が望んでいると見えるような構造をつくられてきてしまった。これを壊していくことは、時間がかかるし痛みもともなうでしょう。なるべく、個人的な痛みのないような、だれとも原則を破れないような形で、基地問題に取り組まねばならない。とにかく隠しつけなければならないし、まだ、新しい基地を作つてはいけないのだということを変更して思いました。今日はありがとうございます。

(二〇〇八年七月六日、安キリスト教学院大学サマール)

資料⑥ 沖縄と戦争の問題を考える書籍の紹介

『戦場が見える島 沖縄 50年間の取材から』

著者：嬉野京子

新日本出版社：1600円



なぜ「島ぐるみ」でた
たかうのか

第1章
米軍占領下の沖縄で
第2章
「祖国復帰」の前と後
第3章
再び「島ぐるみ」と
なったうねり

上映会場で販売中

『ネルソンさん、あなたは人を殺しましたか？ ベトナム 帰還兵が語る「ほんとうの戦争」』

著書：アレン・ネルソン 講談社：450円



ベトナム帰還兵が語る
「ほんとうの戦争」

貧困と人種差別から解放されるために18歳で入った海兵隊。そこでの訓練で、人を殺すことのためらいや、罪の意識が薄れていく。やがて戦地に赴くことになり、降り立ったのはベトナム。「ほんとうの戦争は無慈悲で残虐で愚かでそして無意味です。」

『OKINAWA1965』

著者：都鳥伸也 都鳥拓也

編者：佐野亨

七ツ森書館：1800円



沖縄について、ほとんど予備知識を持たない若い世代が、ドキュメンタリー映画の制作を通して見だしたものは

人との出会いをもとに沖縄の過去と現在を見つめた思索と探求の記録

上映会場で販売中

『辺野古に基地はつぐれない』

著者：山城博治 北上田毅

岩波書店（岩波ブックレットNo.987）：520円



工事は「雨々と」進行…
なんかしていない。

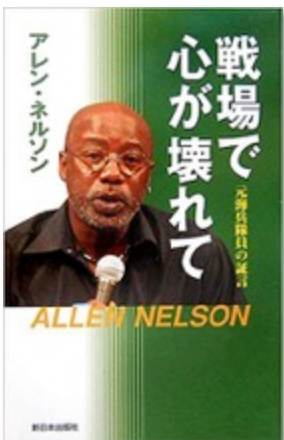
沖縄の美ら海を破壊し、強行される米軍基地建設。しかし県民の抵抗と、あまりの難工事のために、工事は遅れに遅れている。

まだ止められるこれだけの理由。

『戦場で心が壊れて 元海兵隊員の証言』

著書：アレン・ネルソン

新日本出版社：1300円



突然よみがえる戦場、
得体の知れない恐怖…
帰還兵を苦しめる精神の病

…私には、この日本という国もまた、ある意味で私と同じような病を抱えているように見えるのです…

上映会場で販売中

『翁長知事の遺志を継ぐ 辺野古に基地はつぐらせない』

編著者：宮本憲一 白藤博行

自治体研究社 600円



沖縄をアジアの平和と環境と自治の「発信地」に——翁長さんの遺志を

辺野古に巨大な軍事基地を作るか、それを阻止するかは沖縄問題であるだけでなく、今後の日本が日米軍事同盟の強化で戦争タイ瀕へ進むのか、アジアの平和のために憲法を守っていくのかの未来を決する問題です。

資料⑥ 恵庭裁判弁護団の内藤功先生のお話をお聞きして

(9条加憲案の国会上程、国民投票へ進めるとする動きをいま、どのようにしたら止めることができるか、どのようにその欺瞞性を人に話して説得することができるかをずっと考えていました。

そんな時、9月15日、映画『憲法を武器として』の上映会の後の内藤功先生のお話を聞きました。内藤先生は恵庭事件の裁判の弁護団のお一人で、弁護士として弁護の中心にいらっしゃった方です。そのお話の中から報告させていただきます)

内藤先生は、安倍首相の言う「自衛隊に9条を加える」という考えについて、どう考えたら良いか4つのことから語られました。

まず憲法9条に書き込まれた場合の自衛隊はもはや、今までの憲法の枠にとどまらない。「軍隊」になる。集団的自衛権、軍事裁判所。徴兵、国民の軍事動員に道を開く。

(ではそれに対してどうしていったら良いのか?) 日本国憲法が侵略戦争の反省と国民の強い支持のもとに作られたことを国民の中に定着させなければならない。沖縄の知事選が行われているが、沖縄の祖国復帰の想いは憲法の下に復帰したいというもので、基地のない沖縄をめざした切実なものだった。沖縄の人々のそうした視点から憲法の価値を考えていくこと。

南北朝鮮の首脳会談、米朝首脳会談があって、朝鮮半島の非核化、アジアから戦争が遠ざかっているという状況が大きく展開しつつある。ますます憲法9条が現実味をもってくる情勢である。そうした中で日本はどうしていくかを憲法の原点から考える。

質問で「国民の10%位しか自衛隊を違憲と思っていない。でも自衛隊は違憲だといっていかなければならないのではないかと思っているが」に答えて「自衛隊と憲法の関係」について4つの観点からお話をされました。

① 憲法論から考える

② 自衛隊という組織をどうすべきか、政策論から考える。

③ 自衛隊の災害救援での役割について考える。

④ 自衛隊の一部高級幹部と、一般下級隊員、家族とを区別して考える

① 憲法論から考える

憲法解釈論として自衛隊はどう考えようとも合憲とは言えない。違憲論は国民の中では今は少数かもしれないが、法律家の圧倒的多数は自衛隊は違憲。国民にこの本質をよく知らせれば、変わり得る。

② 自衛隊という組織はどうあるべきか。政策論から考える。

25万人の自衛隊を、今すぐに解消させると言っても現実的に難しい。それは歴代政権と最高裁判所に責任がある。ただ朝鮮半島、アジアに戦争がなくなろうとしている今の状況の中で「こんな強い戦力はいらない」という軍縮という形でも、当面進めることが必要。アメリカと癒着しすぎている共同演習や武器購入をやめていくことから、国際情勢に応じて軍縮へ向かうべき。

③ 災害救援での役割から自衛隊をどう考えるか。災害対策のための予算・人員・器材は、消防、警察、自治体などもっと増強すべきところがある。安倍首相はすぐ自衛隊の活動を強調して宣伝したが、だからといって自衛隊が合憲であるということにはならない。

④ 自衛隊の一部高級幹部と、一般隊員やその家族とを区別して考える

自衛隊の統合幕僚長などの一部高級幹部は、政権中枢や米軍や兵器産業と癒着していて、戦前の再現をねらっているようなところがあるが、一般下級隊員はむしろ人に喜ばれる仕事がしたいというような純真でまじめな人が多い。人のために役立ちたいと思って入隊した人が多い。こうした人たちの生命を海外での戦闘で奪われないように守る。

安倍総理は、「自衛隊は必要最小限度の防衛力であって、災害救援に一所懸命やって役に立っている。こう言う自衛隊を違憲というのは可哀想ではないか、失礼ではないか。自衛隊の存在を書き込むだけだ。9条1項も2項も何も変わらない」という。

これはウソだ。これに対して、もし私たちが「自衛隊はなんとなく違憲じゃないね。合憲だ」と思っているとビシッと反論できない。

「自衛隊は違憲だ。それを書き込んだって違憲なんだ」という立場に徹してこそ自衛隊合憲論を打ち破ることができる。違憲論を強くうたっていくことが今こそ大切だ。

そして、「安倍政権の改憲には反対」という人たちと一致点

- ・憲法論では明確に違憲。

- ・自衛隊を解消するには国際情勢、アジアの情勢を平和の方向に持っていく努力が必要。

- ・災害対策は本来自衛隊がやるものではない。

- ・一般下級隊員の人と一部高級幹部を区別する。

で共闘することが急務。

(文責：花崎)



「改ざん通り」は今日も忙しいのなんの!

山田 紳

資料⑦「憲法を考える映画の会」からのお知らせ

これからの「憲法を考える映画の会」

第47回 憲法を考える映画の会

日時：12月8日（土）13：30～16：30

会場：文京区民センター3A会議室

（地下鉄春日駅・後楽園駅）

映画：中国映画『南京！南京！』

（2009年制作・中国映画 陸川監督・133分）



日中戦争のリアル、南京事件のリアル

12月は、1937年に南京大虐殺が起きた月です。日本が起こした戦争、侵略戦争を考えていきます。この映画はフィクションですが、日本兵を敵と見るのではなく、日本兵の苦しみも含め、南京事件がどのようなものであったかを描こうとしています。監督は300冊を超える南京事件の資料・写真集を調べ、南京事件をリアルに再現し、そこで何が行われたかを表現しようとしています。

第48回 憲法を考える映画の会

日時：2019年1月27日（日）13：30～16：40

会場：文京区民センター3A会議室

プログラムは未定

映画『天から落ちてきた男』日本語版制作

グアテマラの市民の闘いを描いた『グラニート』『500年』の日本語版を制作した八木啓代さんと長谷川二ナ先生が今度は、新しいアルゼンチン映画の翻訳に取り組みます。映画『天から落ちてきた男』です。軍事政権下に起きた忌まわしい事件の裏側であった信じがたい実話の真相を解き明かしていくスリリングなドキュメンタリー映画です。八木さんたちは、現在、この日本語版制作資金をクラウドファンディングで11月29日から30日間募っています。是非募集のクラウドファンディング支援ページをご覧ください。

<https://readyfor.jp/projects/caido>

なお映画の案内は『天から落ちてきた男』サイト

<http://caido.latinamerica-movie.com/>

この映画も、『グラニート』『500年』と同様、日本語版完成後、憲法を考える映画の会での上映、およびDVDの販売を予定しています。

憲法映画祭2019の準備

来年の憲法映画祭の日程と会場が決まりました。

と き：2019年4月27日（土）28日（日）

ところ：武蔵野公会堂（吉祥寺駅南口2分）

上映作品、テーマ、プログラムや時間割等はこれから検討します。



私たちの憲法映画祭は、来年で4回目になります。憲法を考える映画の会の上映会も、12月、来年1月、3月と会を重ねることができれば4月にはちょうど50回目になります。

私たちは、第二次安倍政権が出現し、改憲を言い出した2013年4月から「安倍政権によって改憲を許してはならない」との思いから「憲法を考える映画の会」を始めました。しかし「戦争できる国」や改憲の準備とも言える秘密保護法、安保法制、共謀罪法を強行させてしまいました。そして今開かれている、国会で改憲案を説明、通常国会で自衛隊9条加憲改憲案を上程と、国民投票のスケジュールまで言われるところまで来てしまいました。

そうした改憲の動きを許さないためにも、この憲法映画祭を意味あるものにし、その力を拡げて行きたいと思っています。

関連映画上映情報

これまで私達が上映した映画の新しい上映会情報です。

「憲法を武器として」上映会

と き：① 2018年11月24日（土）18時～

ところ：中央区築地社会教育会館視聴覚室

と き：② 2018年12月2日（日）14時～

③ 2018年12月22日（土）14時～

④ 2019年1月13日（日）14時～

ところ：文京区民センター 3A会議室

映 画：「憲法を武器として 恵庭事件知られざる50年目の真実」

ゲスト：内藤功弁護士

（恵庭事件弁護団、元参議院議員）

参加費：1000円

主 催：タキオンジャパン090-3576-6644

「自衛隊加憲」などとまやかしの改憲が進められる中で、恵庭裁判の裁判の中で自衛隊違憲が論じられたことは大きな意義がありました。裁判の弁護団の内藤さんのお話も聞くことができます。是非「憲法」を武器としましょう。